

## 計器

マーク11は、1948年、シャフハウゼンで初めて英国王立空軍 (RAF) の航法用腕時計として製作されました。この時計は機能面で技術的な基準となっただけでなく、その純粋な計器スタイルのデザインは、現代におけるすべてのIWCパイロット・ウォッチのデザインに影響を与えました。

マーク11の歴史は航空の歴史、より正確に言えば、ナビゲーションの歴史と密接な関連があります。今日では、携帯電話を使って地球上の自分の位置を正確に測定することができます。現代の衛星ナビゲーションでは、何もない荒野、海上、真っ暗な夜であっても、位置の測定が可能です。しかし、昔はそうではありませんでした。船舶、そして後に生み出された航空機の乗務員たちにとって、自らの正確な位置を知ることが、長年にわたり大きな課題となっていました。

1930年代から1940年代にかけて、商用パイロットは主にビーコン（無線標識）を利用するか、あるいは有視界飛行方式（VFR）で飛行していました。一方軍隊では「推測航法」に頼って飛行していました。航続距離は、飛行速度と飛行時間に基づいて算出していました。これは、飛行したコースとコンパスを組み合わせる理論上の位置を決定する方法ですが、飛行速度を正確に測定することは不可能である上、横風が飛行機のコースを逸らすこともあるので、「推測航法」の場合には、上手くいっても凡その位置が特定できるだけでした。

第二次世界大戦後、英国空軍 (RAF) は、例えばビーコンやレーダーに基づく新しい航法装置の開発に集中して取り組みました。しかし、その時代の「無線ビーコン」は約300マイルの範囲にしか届かず、地上レーダーは海上で役に立つデータを送信することができませんでした。電子システムに関するこれら諸々の問題に対処するには、パイロットはこれまでも繰り返し試行を重ねてきた天文航法を使用する以外ありませんでした。

船舶で使用されるこの方法は、太陽、月または決まった星などの天体の位置に基づいて経度と緯度を割り出します。これには六分儀とクロノメーターが必要です。クロノメーターは、極めて正確な時計です。しかしながらこれらの航海用計器は、条件や広さが全く異なる航空機のcockpitで使用するには適していません。航空機用の六分儀は比較的早い時期に開発されていましたが、耐久性のある腕時計を探すほうが大変でした。

RAFが採用していた初期の航法用腕時計は、実際のところかなり正確でした。しかし、水漏れしやすいアルミニウム製のケースや真鍮製でクロームメッキされたケースは、北海の塩分の多い空気やアジアの高温多湿の気候には耐えられませんでした。標的に接近するために使用されたレーダー・スクリーンは、さらに問題を抱えていました。強い磁場を発生させるため、cockpit内では時間が狂うのです。これらの課題に対処するため、RAFは全く新しい航法用腕時計の開発を促しました。

それを受けて、1948年にIWCのエンジニアが開発したのがマーク11でした。「ナビゲーターの腕時計 Mk. 11 - Stores Ref. 6B/346」は、ストップウォッチ機能付きの極めて精密なキャリバー 89を採用していました。もう一つの最も重要な特徴として、極めて効果的な防磁性能が挙げられます。当時一般的に使用されていた防磁性材料は摩耗しやすかったため、IWCのエンジニアは上部が文字盤になった軟鉄製のケースを造ったのです。この腕時計のフロントガラスには、cockpit内で急激に気圧が低下した場合でも作動できるように、特別な保護が施されていました。また、夜光インデックス付きでコントラストの高い文字盤は時間が読み取りやすく、夜間や視界の悪い状況でも役に立ちました。

マーク11は、採用された技術だけでなく、その外観に関しても新たな基準を確立しました。年を追うごとに、ナビゲーション・ウォッチのデザインは洗練されていきました。1949年に導入されたとき、文字盤には「1」から「12」までの数字が記されていました。「3」、「6」、「9」、「12」時の位置にある小さな四角形は、すでに夜光素材で作られていました。1952年には、「12」の数字に代わって左右にドットが付いた特徴的な三角形に置き換えられました。これは、現在のIWCパイロット・ウォッチの最も重要な特徴の1つとなっています。

約15年間、英国空軍(RAF)は、最高の航空士のみマーク11を支給していました。1960年代以降、イギリス空軍(British air force)のパイロットたちもこの時計を腕に着ける権利が与えられました。RAFがこれらのナビゲーション・ウォッチにどれほどの価値を見出していたかは、王立グリニッジ天文台以外でそれらの整備を受けることが認められなかったという事実を見ても明らかです。彼らの腕時計は12か月ごとに完全に整備され、着用する者のひとり一人の移動パターンに合うよう、正確に調整されていました。RAFの歴史の中で、これほど集中的にメンテナンスされた時計は他にありません。

その後、干渉を起こさないビーコン・システムが導入されても、マーク11は万が一技術的な問題が発生した場合に備えた重要な「予備航法装置」であり続けました。南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど他の連邦諸国でも、1981年に回収されるまで、この腕時計を使用していました。シャフハウゼンを象徴する企業となったIWCの時計は、民間航空会社、すなわち英国海外航空(BOAC: British Overseas Airways Corporation)へ進出しました。1970年代の初めまで、インド洋を越えてオーストラリアまで飛ぶパイロットは、六分儀とマーク11を使って現在位置を算出していました。

この腕時計には、他にも物語があります。エベレストを最初に征服したニュージーランド人のエドモンド・ヒラリー卿は、1958年、3番目のチームを率いて陸路で南極に到達しました。この遠征中、ニュージーランド空軍の航空士だったヒラリー卿が自分の位置を把握するため頼っていたのは、IWCシャフハウゼンのマーク11だったのです。

## IWC シャフハウゼン

スイスの時計メーカー、IWC シャフハウゼンは1868年の創業以来、永遠の価値をもつ時計を製造し続けています。技術革新と創意工夫に情熱を傾け、世界的な名声を確立するに至りました。そして、世界をリードする高級時計ブランドとして、究極の精度と独創的なデザインを融合させ、高級時計製造のマニファクチュールならではの傑作を世に送り出しています。IWCは環境と社会に対する責任を果たす企業として、持続可能な製造の実践、子供たちや若者を対象とする活動に取り組む世界各国の組織の支援、そして環境保護を専門とする団体との提携を行なっています。

## ダウンロード

画像は [press.iwc.com](http://press.iwc.com) より無料でダウンロードいただけます。

## その他のインフォメーション

IWC Schaffhausen  
Department Public Relations  
E-Mail [press-iwc@iwc.com](mailto:press-iwc@iwc.com)  
Web Site [press.iwc.com](http://press.iwc.com)

## インターネットおよびソーシャルメディア

ウェブサイト [iwc.com/ja](http://iwc.com/ja)  
Facebook [facebook.com/IWCWatches](https://facebook.com/IWCWatches)  
YouTube [youtube.com/iwcwatches](https://youtube.com/iwcwatches)  
Twitter [twitter.com/iwc](https://twitter.com/iwc)  
LinkedIn [linkedin.com/company/iwc-schaffhausen](https://linkedin.com/company/iwc-schaffhausen)  
Instagram [instagram.com/iwcwatches\\_jp](https://instagram.com/iwcwatches_jp)  
Pinterest [www.pinterest.com/iwcwatches/](https://www.pinterest.com/iwcwatches/)  
Google+ <https://plus.google.com/+iwcwatches>